

鈴木正三における「恩」の思想と「娑婆」世界

澤 野 純 一

一 はじめに

鈴木正三の出家(落髮遁世)の約一年前に書かれた『盲安杖』は、正三初の著作であるが、『盲安杖』の特徴のひとつとして抽出出来るのが、正三の「恩」の思想である。

正三は、『盲安杖』における十の項目の一つ「物事に他の心に至るべき事」の中で、「四恩」(天地の恩・師の恩・国王の恩・父母の恩)を認識することの重要性を述べた上で、次に「四恩」には含まれない「衆生恩」について言及している。『盲安杖』執筆の時点で、正三が「四恩」についてもさることながら、「衆生恩」を特に重視していたことは、この「衆生恩」について述べた直後に衆生に対する具体的な記述を「四恩」の記述全体よりも長く行っていることから明らかである。⁽¹⁾

この正三の「恩」(特に「衆生恩」)の思想については、古くは鈴木大拙に始まり、高島元洋氏、加藤みち子氏などが着目しており、特に高島・加藤氏に共通している問題意識は、

正三が「世界」をどのように理解しているかということであり、その見解は、「正三は世界に「恩」という概念を根底に据えた上で、衆生は世界に存在する限り世界内に存在する諸々の事象からの恩を蒙ることから逃れて生きることは出来ず、また恩の関係からも逃れられないと考えていた」ということであろう。両氏の指摘するように、正三の「恩」の思想は、正三の現実世界に対する理解と密接に結びついていると言える。⁽²⁾

ところが、『盲安杖』以降の著作を見ると、「恩」の思想そのものは至る所に語られているものの、「衆生恩」という言葉自体が前面に出て来ることはなくなる。このことは何を示唆するのであろうか。そこで本論においては、正三における『盲安杖』以降の著作から彼の「恩」の思想の変遷を探り、そして正三の「恩」の思想と切り離すことの出来ない「娑婆」世界に対する理解とその関わりについて検討したい。

二 正三における「恩」思想の変遷について

正三の著作において『盲安杖』以降、「衆生恩」という言葉が前面に出て来なくなる代わりに目立って登場してくるのが「上四恩を報じ下三有を度す」という言葉である。例えば、『念仏草紙』に

比丘尼問 上四恩を報じ下三有をたすくると申事ハ いかようの事に候や

答 上四恩と申ハ。天地の恩。師匠の恩。父母の恩。国王の恩なり。此四ツの恩。たかき事。いふにあまりあり。下三有と申ハ。地獄、餓鬼、畜生の三ツなり。(『全集』上・一三二頁)

とあり、正三の見解によれば、上四恩には「衆生恩」は登場しない。また、下三有の衆生の位置づけは、人間界の衆生には言及せず、地獄・餓鬼・畜生と限定しており、いわゆる一般的な三有の範囲、つまり欲界・色界・無色界とは見解を異にしている。⁽³⁾

一方で、確かに「衆生恩」という言葉は出て来ないが、人間界における衆生を含めた「衆生恩」に関連すると考えられる言及は、正三の著作、特に語録・拾遺集の中に多数見出すことが出来る。例えば『驢鞍橋』の中から一つの言説を抽出してみよう。

総而娑婆ト云物ハ、互ニ助合テ過也。我モ娑婆ノ影ニテ過ナガラ、

人ヲバ過スマイト云ハ非義也。其上、一人シテ扶持スル事コソ不成トモ、手ノ内ヲ以テ、世人ト寄合テ養事ハ易キ事也。(『全集』下・一五六頁)

正三の「恩」の思想は、正三の現実世界に対する理解と密接に結びついており、特にここで語られている「衆生恩」に関連すると考えられる言説は、正三の「娑婆」世界に対する肯定的な理解に繋がっていると考えることが可能だろう。しかし、この様な言及がありながらも、「衆生恩」と言う言葉が消えてしまっている点に着目しなければならない。何故ならば、上四恩・下三有に出て来ない「人間界の衆生」はどこに行つたのか、という問題と関連するからである。

『盲安杖』の次の著作は、『盲安杖』から十二年経って執筆された『武士日用』である。その後『農人日用』『職人日用』『商人日用』が随時加筆された『四民日用』が、後に『万民徳用』の中に収められることになるが、この『四民日用』の基本的な主題は、それぞれの生業を持った人間が、その生業を持ったまま(出家することをせず)各々の生活の中で、いかに仏道を修し行じてゆくか、ということである。この『四民日用』の基本的な性格を考慮すると、正三は、様々な生業を為しながら生きる「人間界の衆生」に、『盲安杖』におけるよりも積極的・能動的な役割を期待していたと考えられる。

例えば『農人日用』には、「農業則佛行なり。意得悪時ハ

賤業也。信心堅固なる時ハ菩薩の行なり。（略）万民の命をたすけ、虫類等に至るまで施すべしと大誓願をなして」（『全集』上・一二五頁）とあり、また『反故集』では、「是二就テ、予、一ノ念願アリ、縦ヒ此身ハ奈落ノ底ニ沈ト云トモ、恩ヲ知ヌル衆生トナシ玉ヘト、三宝ノ加被ヲ祈ル者也」（『全集』下・二三〇頁）と語られているが、ここで菩薩の行をなし、大誓願を起こすのは農人であり、また恩を知りぬる「衆生」とは、様々な生業を為して生きる当時の民衆のことであると考えられる。このことにより、衆生（正三の言う所の「四民」）は、正三と同じく仏道を修し行じて、上四恩を報じ下三有を度す主体としての役割を担うものとして位置づけられていると見るべきであろう。

三 正三にとっての「娑婆」世界について

さて、特に語録・拾遺集に顕著に見られる「衆生恩」に関連すると考えられる言説は、総じて正三の「娑婆」世界における肯定的な理解を代表するものである。一方で正三には、「暇ノ娑婆ヲ我娑婆ニ思ヒ（略）タワ事ノ娑婆ニ心ヲ抜シ居事大キナル油断ナリ（略）必一大事ヲ忘レテ、世間ニ機ヲ抜スベカラズト也」（『全集』下・五七〜五八頁）という様な「娑婆」世界に対する厳しい否定的な言及が多数存在する。加えて正三には、「去夜、小用ニ出給次デ、身ヲ扣テ曰、咦、ムサイ

糞袋哉、大小用ノ時ハ、一入髓ニ徹シテ不浄ノ躰哉ト、イヤニ思ワル、也、扱扱、詮モ無物哉ト也」（『全集』下・二〇二頁）という様な身の不浄に関する極めて厳しい説示が頻出する。

以上の様に、正三の娑婆観には、肯定的な側面と共にこの様な厳しい否定的側面があるのであり、言わば否定と肯定が同位して存在している。そして、肯定的側面においては、正三自身、ひとりの人間界の衆生の立場から語っているのであり、この側面においては「一人シテ扶持スル事コソ不成トモ、手ノ内ヲ以テ、世人ト寄合テ養事ハ易キ事也」と言われる様に娑婆という所は「互ニ助合テ過」る場所となる。

しかし、この側面のみでは娑婆を本当に救うことにはならない。そこで、正三の娑婆に関する別のあり方が提示されることになる。正三は『驢鞍橋』において、仏法は世法万事に使うことだとして次の様に述べている。

示曰、昔ヨリ僧俗ニ付、道者多シトイエトモ、皆佛法知ニ成タ計ニテ、世法万事ニ使フト云事ヲ云タル一人モナシ、有モコソセズカ、今迄終不聞、大略我云始カト覚ル也、（『全集』下・一七七頁）

この正三の仏法の大きな特色である「仏法を世法万事に使う」という事態は、衆生恩の世界とはまた別の次元の事柄であり、娑婆に対するもっと積極的な関与があると言うべきである。ここにおいて正三の激しい娑婆の否定、身の否定の意

義が明らかになる。例えば、『念仏草紙』には、

比丘尼問 何事もはかなき。世なりといふ人ハ。此よを。すつる
あいだ此世のためにはあたとなるまじきやらん。答 此世をすて
て。後生をねがへと。おしえ給ふことハ。このよをよくして。こ
の世界を則浄土に。なし給はん。ためなり。(『全集』上・一二七
頁)

とあるが、正三における「否定」の持つ意味が示されている
と言えよう。つまり、真に娑婆を救う為には、娑婆を否定し
切つて娑婆を離れる過程が必要なのであり、正三において強
い娑婆の否定と激しい身の不浄観(身の否定)は、そこに至
る為を避けて通ることの出来ない作業であったのである。更
に言えば、娑婆と身を徹底的に否定し切る作業の後に現れる
のが「仏法を世法万事に使う」という娑婆に対する新しい関
与の仕方なのであり、このあり方は正三の娑婆に対する否定
と肯定を呑み込んだ上での更に高次の次元における事態であ
ると言えよう。つまりは正三自身が目指し弟子や「四民」に
求めたのは、最終的にはこの地点であったと考えられる。

四 おわりに

鈴木正三は、肯定的かつ否定的に深く娑婆世界に立ち入る
うとした禅僧であった。総じて正三の四恩は、第二の師の恩
を除くと「現実の娑婆での生存を成り立たしめているものに

対する恩」という側面が強い。それに加えて「衆生恩」の重
視という態度があるのであり、これらのことは正三の現実の
世界に対する並々ならぬ関心の深さを伺わせるものである。
しかし、正三の最終的な「娑婆」世界への関与の形態であ
る「仏法を世法万事に使う」というあり方が、実際の所いか
なる事態であるか、という命題は未だ解明されているとは言
い難い。このことを考察してゆくことは、正三の仏法を解明
してゆく上での最重要課題のひとつであると言えるだろう。

- 1 神谷満雄・寺沢光正世編集校注『鈴木正三全集』鈴木正三研
究会・二〇〇五年(以下『全集』と略称)上・二四〇―二六頁。
- 2 高島元洋「鈴木正三における「世法則仏法」の成立―天道を
めぐる近世思想の一考察」(『倫理学年報』第二十六号、
一九七七年)・加藤みち子「鈴木正三における「天道」」(『日本
思想史学』第二十七号、一九九五年)参照。
- 3 『反故集』にも、これとほぼ同じ内容の記述がある。『全集』下・
二二七―二二八頁。

〈キーワード〉 鈴木正三、恩、衆生、娑婆

(花園大学非常勤講師)